

# 現代日本の青年期女子における 死のイメージとグリーフケアの認知度

● 阿部 洋子

## I 目的

高齢者が人口の4分の1を超えた現在、それに加え、政府は在宅介護・看病の促進を計画している。その際、家族だけでケアを実践することは、介護・看病する側の家族にとっても、介護・看病をされる側の患者さんにとっても、医療面でも、介護面でも難しいことになると考えられる。在宅で看取ることが少なくなり、病院で最期を遂げることが常態化した現在、介護・看病の後、これまでとは異なるグリーフ（悲嘆）を感じるようになるのではないだろうか。そうであるならば、介護・看病する側、される側共に、情緒面の柔軟性と強靱性、泣くことが許される居場所の提供などを再認識する必要があるように思われる。

そのようなことから、医療系、看護系、介護系の領域ではグリーフケア、グリーフワークなどの重要性が語られ、患者や利用者が入院中や入所中に亡くなられた場合、家族のグリーフケアとして、家族会を開催したり、手紙を書いたりするなどの方法がとられている。

勿論、グリーフケアは、高齢者だけの問題ではなく、事故や災害や自死など、突然の死に対峙せざるを得なくなった家族を対象にする場合もある。いずれにしろ、グリーフ（悲嘆）の過程は、Fink (1967) の①衝撃・ショック、②防衛的退行、③承認、④適応、あるいは、Deeken (1986) の①精神的打撃と麻痺状態、②否認、③パニック、④怒りと不当感、⑤敵意と恨み、⑥罪の意識、⑦空想形成と幻想、⑧孤独感と抑うつ、⑨精神的混乱と無関心、⑩あきらめと受容、⑪新しい希望、⑫立ち直り、などに代表されるように、受け入れがたい衝撃を体験した後、徐々に適応に向かい、立ち直るとされている。そして体験者本人の立ち直りに焦点を当てる場合が、グリーフワークであり、それを支援する側に焦点を当てる場合が、グリーフケアだといえよう。

ところで、Fink や Deeken の研究は、グリーフ（悲嘆）のプロセスに関するものであり、悲しみや苦しみを乗り越える具体的な方法については、多くは語られていないといえよう。一方、サポートする側の立場からの著書としては、江角 (2010) やウォーデン (2011) や広瀬 (2011) などがあげられよう。そこでは、遺族に対する段階ごとの望ましい対応方法が述べられている。本調査では、プロセスも重要ではあるが、グリーフケアの具体的な方法を知りたいと考えた。特に、医療系、看護系、介護系でない女子大学生が、悲しみ・苦しみを抱えている遺族に対して、どのように関わったらよいと感じているかを知ることと、「死」について、どのようなイメージを持っているかについて調査することで、グリーフケアについて、専門的に勉強していない者に対して、グリーフケア教育をどのように提示していけばよいかについて考える一助としたい。

## II 方法

### 1. 調査対象と調査時期

埼玉県内にある A 大学の女子学生54名 (19~21歳、平均19.352歳：SD=0.554) に対し、平成

\* 跡見学園女子大学文学部臨床心理学科

28 (2016) 年 6 月 16 日、授業時間中に、質問紙を配付し、調査者が口頭で調査の説明および協力依頼を行った。その際、調査への協力は任意であり、協力の無い場合も不利益を被らないこと(例えば成績には無関係であることなど)、回答は無記名であり、結果は統計的処理を行うため、個人の回答が特定されないことなどを伝えた。また質問文を読み、調査対象者が心理的負担を感じた場合は、直ちに調査用紙への回答を中断してよいこと。調査用紙の回収は授業時間終了時に、教室の前方の机の上に、ランダムに置いてもらうようにし、個人が特定できないよう配慮することも伝えた。更に、同一内容を、調査用紙の表紙にも明記した。以上、質問紙への回答をもって、調査への同意を得たものとした。

## 2. 質問紙の構成

### (1) グリーフケア尺度

「グリーフケア」という言葉は、医療領域、看護領域、介護領域では、一般的に使われるようになったが、その他の領域の学生たちにとっては、耳馴染みがないことを考慮し、最近1年間ほどの間に、大切な人を亡くし、深い悲嘆に暮れている遺族に対する適切な接し方について回答を求めることにした。つまり回答者自身が、遺族が立ち直るための手助けをする人であると想像した上で、どのような態度をとるかを考えて答えてもらうことで、グリーフケアについて、どのように考えているかを測定することにした。質問項目は、フィンク (1967) やデーケン (1986) のグリーフ (悲嘆) のプロセスなど、グリーフケアに関する様々な書籍に書かれている内容を参考にしたが、特に、島根県立看護短期大学の江角 (2010) による、施設で死亡した患者の遺族に対するグリーフプロセスとその段階ごとのケアの内容を参考にすることにした。江角は、自身が愛娘を交通事故で突然に失った経験を通して、グリーフケアのプロセスだけでなく、段階ごとの、遺族に対するケアの重要性を感じ、次のように述べている。①対象喪失(ショックの時期)には、傍らで、そっと温かく見守る。無理に感情表出はさせない。沈黙を受け入れる。非言語的コミュニケーションを用いて接するなど。②否認(防衛的退行の時期)には、無理に現実を突きつけない。現実を受け入れる時間を十分に提供する。つじつまの合わない内容を聞き直さない。身体状態に留意しながら見守るなど。③現実検討(承認に伴う動揺の時期)には、怒りや悲しみや罪責感を表出させる。怒りの感情を否認しない。怒りを感じるのは当然だと受け止める。安易な慰めや、励ましをしない。十分に泣ける時間と場所を提供するなど。④抑うつ(承認の時期)には、抑うつ的になるのは、心のエネルギーを充電するために必要な時間であることを強調する。焦らずに見守る。「何か役に立てることがあったら言って欲しい」と述べるに止め、無理に介入しないなど。⑤再適応(出発の時期)には、故人を追想するときに、その思い出を供給し、十分に話に傾聴する。再生できる力を誰もが持っていると感じる。今後、なすべき使命について語り合う。自助グループの紹介をするなどであり、江角の指摘には支援者が、遺族に対するときの、段階ごとの望ましい対応方法が述べられていると感じた。しかし、今回の調査では、フィンクの5段階のうち「対象喪失(ショックの時期)」、「否認(防衛的退行の時期)」、「現実検討(承認に伴う動揺の時期)」と、デーケンの12段階のうち、①精神的打撃と麻痺状態、②否認、③パニック、④怒りと不当感、⑤敵意と恨み、⑥罪意識、⑦空想形成・幻想、までの7段階に対応するケアの内容を選定した。ケアの内容を前半・後半と分けることには問題はあろうが、調査対象者の精神的負担を考慮し、今回の調査では、前半部分を検討することにした。そして、江角のケアの内容を質問文に改変すると共に、著者のゼミに所属する女子大学生の意見を聴取した結果、最終的に、「No.1 本人のそばにいて、そっと温かく見守る」、「No.2 つじつまの合わない内容の話でも聞

き返さない」、「No.3 早く立ち直ろう等の安易な励ましはしない」、「No.4 無理に現実を突きつけない」、「No.5 感情を出しやすい場を整える」、「No.6 非言語的コミュニケーション（スキンシップ等）をとる」、「No.7 無理に感情表出をするよう催促しない」、「No.8 悲しみは当然の感情として受け止める」、「No.9 “怒り”は当然の感情として受け止める」、「No.10 一人で十分に泣くことのできる時間と場所を提供する」の10項目を選定し、「全くそう思わない：1点」から「とてもそう思う：5点」までの5件法で回答を求めた。

## （2）グリーフケアに関する認知度

医療、看護、介護以外の領域の大学生が、グリーフケアという言葉をもどの程度知っているのかを調査するために、(i) グリーフケアという言葉を知ったことがあるか否かについて、回答を求めた。次に(ii) グリーフケアという言葉をもどの程度知っているかについて、「No.1 言葉は知っているが、内容については全く知らない」、「No.2 言葉は知っているが、内容についてはほとんど知らない」、「No.3 言葉は知っているが、内容についても少し知っている」、「No.4 言葉も知っているし、内容についてもよく知っている」、「No.5 言葉も知らないし、内容も全く知らない」までの5つの中から1つを選択してもらった。更にフィンク(1967)とデーケン(1986)の書籍に書かれているものから抽出した(iii)「グリーフケア(悲嘆のケア)」の定義文を挙げ、その中から「あなた自身にとって、最も当てはまると思うグリーフケア」はどれかを問い、1つだけ回答してもらった。具体的には、①「人ととの離別(特に死別)時に、自然と始まる立ち直りのプロセスのこと」、②「身近な人ととの死別を経験し、悲嘆にくれる人をそばで支援することで、悲しみから立ち直れるようにすること」、③「死化粧、死後処理のこと」、④「スピリチュアル(霊的・精神的)な力やエネルギーを用いた治療法のこと」、⑤「心理的な安心感を与えること」、⑥「悲しみ・苦しみを紛らわせて、心をなごやかにし、楽しませること」の6項目の中から1つを選択してもらった。

(3) 死のイメージ尺度：「死」という言葉を知ったときに、どのようなイメージを持つかについて、SD法を用いて測定した。形容詞対の選定に当たり、井上ら(1985)によって収集された「明るいー暗い」、「好きなー嫌いな」、「たくましいー弱々しい」、「複雑なー単純な」、「意欲的なー無気力な」、「外向的なー内向的な」、「優れているー劣っている」など68対の形容詞の中で、「死」からイメージされる形容詞として適切であるかどうかを著者のゼミ生と共に検討し、最終的に13対を選定し、対極に形容詞を左右に配置し、「どちらともいえない」を中間に置き、「そう思う」、「ややそう思う」を両端に置く5件法で回答を求めた。具体的には、①暗いー明るい、②きたないーきれいな、③消極的ー積極的、④つめたいーあたたかい、⑤きびしいーやさしい、⑥弱いー強い、⑦静かなー騒がしい、⑧不安定なー安定した、⑨ぼんやりしたーはっきりした、⑩古いー新しい、⑪不自然なー自然な、⑫かたいーやわらかい、⑬尊重できないー尊重できる、であった。

## Ⅲ 結果

### 1. グリーフケア尺度(遺族に対する適切な態度)得点とクラス構成

#### (1) グリーフケア尺度得点の分布

悲嘆に暮れている人が立ち直るために、どのような援助行動を取るかについて選定された10項目について「全くそう思わない」を1点、「とてもそう思う」を5点として集計した(10~50点)。その結果、33点から50点の範囲で回答がなされており、10項目すべてに「とてもそう思う」と回

答した者（合計得点＝50点）が1名いた。また、平均得点は41.481点（SD＝3.840）であり、全体として「ややそう思う」、「とてもそう思う」に偏って回答された。次に、最も平均得点が高かった項目は「No.8 “悲しみ”は当然の感情として受けとめる」が4.537点（SD＝0.605）で、最も平均得点が低かった項目は「No.6 非言語的コミュニケーション（スキンシップ等）をとる」が3.704点（SD＝1.039）であったが、高得点と低得点の間の差は、1点未満であり、高得点に偏って回答される傾向がみられた。

## （2）グリーフケア尺度のクラスタ分析（図1）

次に、この尺度の構造を調べるためにクラスタ分析（ウォード法）を行った。その結果、4つのクラスタが抽出されたが、江角のプロセスごとのケアの内容とは異なる結果となった。

第1クラスタは、「No.1 本人のそばにいて、そっと温かく見守る」、「No.6 非言語的コミュニケーション（スキンシップ等）をとる」、「No.9 “怒り”は当然の感情として受け止める」であった。これら3項目は、言語によらないケアとの関連が大きいことから、第1クラスタは「黙って寄り添う」ケアと命名した。これらは、江角の第1段階（対象喪失、精神的打撃と麻痺状態）の中の2項目で「No.1 本人のそばにいて、そっと温かく見守る」、「No.6 非言語的コミュニケーションをとる」と、第3段階（現実検討、怒りと不当感、罪意識など）の中の1項目で「No.9 “怒り”は当然の感情として受け止める」が組み込まれた。

第2クラスタは「No.2 つじつまの合わない内容の話でも聞き返さない」、「No.5 感情を出しやすい場を整える」、「No.10 一人で十分に泣くことのできる時間と場所を提供する」であった。これら3項目は、居場所との関連が大きいことから、第2クラスタは「居場所の提供」のケアと命名した。これらは、江角の第2段階（否認、パニック）の中の4項目中3項目が組み込まれた。具体的には「No.2 つじつまの合わない内容の話でも聞き返さない」、「No.5 感情を出しやすい場を整える」、「No.10 一人で十分に泣くことのできる時間と場所を提供する」であった。

第3クラスタは「No.3 早く立ち直ろう等の安易な励ましはしない」、「No.4 無理に現実を突きつけない」であった。これら2項目は、励ましとの関連が大きいことから、第3クラスタは「励まさない」ケアと命名した。これらは、江角の第2段階の中の1項目で「No.4 無理に現実を突きつけない」と、第3段階の中の1項目で「No.3 早く立ち直ろう等と安易な励ましはしない」であった。

第4クラスタは「No.7 無理に感情表出をするよう催促しない」、「No.8 “悲しみ”は当然の感情として受け止める」であった。これら2項目は、悲しみとの関連が大きいことから、第4クラスタは「悲しみを受け止める」ケアと命名した。これらは、江角の第1段階の中の1項目で「No.7 無理に感情表出をするよう催促しない」と、第3段階の中の1項目で「No.8 悲しみは当然の感情として受け止める」であった。

## 2. グリーフケアに関する認知度

### （1）グリーフケアという言葉の認知度

医療、看護、介護の領域でない大学生が、そもそも「グリーフケア」という言葉を知っているかどうかを確認した。その結果、グリーフケアという言葉を知ったことがあると回答した学生は3名（5.556%）、聞いたことがないと回答した学生は51名（94.444%）であり、ほとんどの学生がグリーフケアという言葉を知らないという結果を得た。

## (2) グリーフケアという言葉の内容の理解度

次に、グリーフケアという言葉の内容をどの程度知っているかについて回答を求めた。その結果、「No.1 言葉は知っているが、内容については全く知らない」と回答した学生は1名(1.852%)、「No.2 言葉は知っているが、内容についてはほとんど知らない」は4名(7.407%)、「No.3 言葉は知っているし、内容についても少し知っている」は0名(0.000%)、「No.4 言葉も知っているし、内容についてもよく知っている」も0名(0.000%)、「No.5 言葉も知らないし、内容も全く知らない」は49名(90.741%)であった。ほとんどの学生がグリーフケアという言葉を知らないという結果から、当然のことではあるが、内容の理解度は、ほとんどないという結果を得た。言葉を知っている者も、内容についてはほとんど知らないという結果であり、医療系、看護系、介護系の領域以外の学生には、「グリーフケア」という言葉が未だ、浸透していないという現状を得た。

## (3) 「グリーフケア(悲嘆のケア)」という言葉の定義

更に、グリーフケアが、悲嘆を感じている人を対象にしたケアであることを提示した上で、どのような定義が最も適しているかについて回答を求めた。その結果、「No.1 人との離別(特に死別)時に、自然と始まる立ち直りのプロセスのこと」と回答した学生は14名(25.926%)、「No.2 身近な人との死別を経験し、悲嘆にくれる人をそばで支援することで、悲しみから立ち直れるようにすること」は32名(59.259%)、「No.3 死化粧、死後処理のこと」は1名(1.852%)、「No.4 スピリチュアル(霊的・精神的)な力やエネルギーを用いた治療法のこと」は0名(0.000%)、「No.5 心理的な安心感を与えること」は6名(11.111%)、「No.6 悲しみ・苦しみを紛らわせて、心をなごやかにし、楽しませること」は1名(1.852%)であった。

60%程度の学生は、グリーフケアという言葉を知らないものの、無理やり「グリーフケア(悲嘆のケア)」の内容を求められると、「身近な人との死別を経験し、悲嘆に暮れる人をそばで支援することで、悲しみから立ち直れるようにすること」を選択し、25%程度の学生は、「人との離別(特に死別)時に、自然と始まる立ち直りのプロセスのこと」を選択した。

## 3. グリーフケア尺度と言葉の定義との関係

次に、グリーフケア尺度と、言葉の定義(①自然と始まる立ち直りのプロセス、②傍にいて支援すること、⑤心理的な安心感など)との関係について検討するため、グリーフケア尺度の4つのクラスタごとの合計得点の高得点群と低得点群において、どのような定義づけを行なっているか、クロス集計を実施した。即ち、グリーフケア、深い悲嘆に暮れている人に対する支援の定義として、選択頻度が高かった「自然と始まる立ち直りのプロセス」、「傍にいる支援、悲しみから立ち直ることができるようにすること」、「安心感を与える」の内容が何であるか、具体的にどのような方法をとるかについて不明確である。例えば、支援の内容が言葉によるものなのか、励ますことなのか、黙って寄り添うことなのか、十分に泣くための時間や場所の提供なのかについて、より詳細な情報を得ることが重要だと考えたからである。なお、「No.3 死化粧、死後処理」を選択した者が1名、「No.4 スピリチュアルな力やエネルギーを用いた治療法」を選択した者は0名、「No.6 悲しみ・苦しみを紛らわせて、心を和やかにし、楽しませる」を選択した者が1名であったため、この3項目については、残念ではあるが、今回の結果には、記述しないことにした。

第1クラスタ(「黙って寄り添う」ケア)の高得点群は12点以上(32名、59.3%)、低得点群は

11点以下 (22名、40.7%) であった。グリーンケアの定義の「No.1 自然と始まる立ち直りのプロセス」の選択者は、高得点群 (9名、16.7%) の方が、低得点群 (5名、9.3%) より多かった。「No.2 傍にいて支援することで、立ち直れるようにする」は、高得点群 (19名、35.2%) の方が、低得点群 (13名、24.1%) より多かった。「No.5 心理的な安心感を与える」は、低得点群 (4名、7.4%) の方が、高得点群 (2名、3.7%) より多かった。

第2クラスタ (「居場所の提供」のケア) の高得点群は13点以上 (26名、48.1%)、低得点群は12点以下 (28名、51.9%) であった。定義については「No.1 自然と始まる立ち直りのプロセス」は、低得点群 (9名、16.7%) の方が、高得点群 (5名、9.3%) より多かった。「No.2 傍にいて支援することで、立ち直れるようにする」は、高得点群 (18名、33.3%) の方が、低得点群 (14名、25.9%) より多かった。「No.5 心理的な安心感を与える」は、高得点群 (3名、5.6%) と、低得点群 (3名、5.6%) は同数であった。

第3クラスタ (「励まさない」ケア) の高得点群は9点以上 (28名、51.9%)、低得点群は8点以下 (26名、48.1%) であった。定義については「No.1 自然と始まる立ち直りのプロセス」は、高得点群 (9名、16.7%) の方が、低得点群 (5名、9.3%) より多かった。「No.2 傍にいて支援することで、立ち直れるようにする」は、低得点群 (18名、33.3%) の方が、高得点群 (14名、25.9%) より多かった。「No.5 心理的な安心感を与える」は、高得点群 (4名、7.4%) の方が、低得点群 (2名、3.7%) より多かった。

第4クラスタ (「悲しみを受け止める」ケア) の高得点群は9点以上 (32名、59.3%)、低得点群は8点以下 (22名、40.7%) であった。定義については「No.1 自然と始まる立ち直りのプロセス」は、高得点群 (9名、16.7%) の方が、低得点群 (5名、9.3%) より多かった。「No.2 傍にいて支援することで、立ち直れるようにする」は、高得点群 (18名、33.3%) の方が、低得点群 (14名、25.9%) より多かった。「No.5 心理的な安心感を与える」は、高得点群 (3名、5.6%) と、低得点群 (3名、5.6%) は同数であった。

#### 4. 「死」のイメージ

##### (1) 「死」のイメージの形容詞対の評定平均値 (図2)

「死」からイメージされるとして選定された13対の形容詞対について、ネガティブなイメージから、ポジティブなイメージに向けて、1～5点の評定値を配し、集計した。その結果、「No.1 暗い—明るい」は、評定平均値が1.352点 (SD=0.619)、「No.2 きたない—きれいな」は、評定平均値が3.333点 (SD=0.777)、「No.3 消極的—積極的」は、評定平均値が2.148点 (SD=0.960)、「No.4 つめたい—あたたかい」は、評定平均値が1.426点 (SD=0.716)、「No.5 きびしい—やさしい」は、評定平均値が2.463点 (SD=1.094)、「No.6 弱い—強い」は、評定平均値が2.574点 (SD=1.297)、「No.7 静かな—騒がしい」は、評定平均値が1.222点 (SD=0.462)、「No.8 不安定な—安定した」は、評定平均値が2.500点 (SD=1.424)、「No.9 ぼんやりした—はっきりした」は、評定平均値が2.741点 (SD=1.507)、「No.10 古い—新しい」は、評定平均値が2.667点 (SD=1.009)、「No.11 不自然な—自然な」は、評定平均値が4.556点 (SD=0.816)、「No.12 かたい—やわらかい」は、評定平均値が2.315点 (SD=1.179)、「No.13 尊重できない—尊重できる」は、評定平均値が3.852点 (SD=0.940) となり、どちらかといえば、「静かな (評定平均値=1.222点)」、「つめたい (評定平均値=1.426点)」、「暗く (評定平均値=1.532点)」、「消極的 (評定平均値=2.148点)」で、「かたい (評定平均値=2.315点)」、「きびしい (評定平均値=2.463点)」、「不安定な (評定平均値=2.500点)」、「弱い (評定平均値=2.574点)」、「古い (評

定平均値=2.667点)」、「ぼんやりした (評定平均値=2.741点)」ものであるが、その一方で「きれい (評定平均値=3.333点)」で「尊重できる (評定平均値=3.852点)」、「自然な (評定平均値=4.556点)」こととして捉えられていることが分かった。

## (2) 「死」のイメージの形容詞対のクラスタ分析 (図3)

次に、13対の形容詞対の構造を検討するために、クラスタ分析 (ウォード法) を行なった。その結果、4つのクラスタが抽出された。

第1クラスタは、「暗いー明るい」、「きびしいーやさしい」、「消極的ー積極的」、「不安定なー安定した」の4つの形容詞対から構成されたので、「暗さ、不安定さ」と命名した。

第2クラスタは、「きたないーきれい」、「かたいーやわらかい」、「弱いー強い」、「古いー新しい」から構成されたので、「美醜、弱さ」と命名した。

第3クラスタは、「つめたいーあたたかい」、「静かなー騒がしい」から構成されたので、「静寂さ、冷たさ」と命名した。

第4クラスタは、「ぼんやりしたーはっきりした」、「尊重できないー尊重できる」、「不自然なー自然な」から構成されたので、「自然、尊重」と命名した。

## IV 考察

### 1. グリーフケア尺度得点とクラスタ構造

#### (1) グリーフケア尺度得点の分布

「グリーフケア尺度」の合計得点は、最低合計得点が33点であり、平均得点が41.481点と「どちらともいえない」よりむしろ「ややそう思う」、「とてもそう思う」に偏って回答していることが分かった。これは、調査対象者の女子大学生が、大切な人を亡くして、1年未満の遺族は、当然、深い悲嘆に暮れていると感じていたということであろう。実際に1つ1つの項目の得点をみると「No.8 “悲しみ”は当然の感情として受け止める (平均得点=4.537点)」、「No.10 一人で十分に泣くことのできる時間と場所を提供する (平均得点=4.426点)」が高い得点を示していることも明らかであろう。しかし、その一方で「No.6 非言語的コミュニケーションをとる (平均得点=3.704点)」、「No.2 つじつまの合わない内容の話でも聞き返さない (平均得点=3.741点)」、「No.9 “怒り”は当然の感情として受け止める (平均得点=3.963点)」は低い得点を示しており、1年経過すれば、そろそろ言語による励ましが重要であるとか、つじつまの合わないことを言った場合は訂正することが大切であるとか、怒りの感情を持つことは適切ではないと思っているという傾向がみられた。ここで怒りは自分に向けられている罪責感であるか、医療従事者や運命のようなものに向けられた不当感であるかについては不明である。この点について、今後、詳細な検討を行いたい。

#### (2) グリーフケア尺度のクラスタ分析

今回の調査では、江角 (2010) によって述べられた遺族に対する段階ごとの適切なケアの内容として、フィングの5段階のうち「対象喪失」、「否認」、「現実検討」と、デーケンの12段階のうち「精神的打撃と麻痺状態」から「空想形成・幻想」までの7段階に対応するケアの内容を選定した。その結果、4つのクラスタが抽出されたが、江角の分類と異なる結果を得た。

本調査では、第1クラスタ (黙って寄り添うケア) として、対象喪失による精神的打撃を受けた遺族に対しては、傍でそっと温かく見守り、言語的ではなく非言語的コミュニケーション (傾

く、見つめる、スキンシップなど)による支援と、不当感などにより生ずる怒りの感情をそのまま受け止めるという江角による「現実検討」の段階の支援方法が1つにまとまっている。この相違は、江角の場合は、施設で死亡した患者の遺族と限定していることによるのかもしれない。本調査では、施設での死亡と限定していないため、調査対象者の女子大学生が、「死」を長患いの病死者、自死者、事故死者など、様々な状況を考えていたかもしれない。事故死などであれば、第1段階から、怒りを感じることはあると考えられる。したがって、どのような「死」であったのか、その状況を考慮することが、グリーフケアの方法を選定する際に重要だということかもしれない。つまり、悲嘆のプロセスの段階を一般化することは難しく、「死」の状況を考慮した上でのプロセスと、ケアの内容を考えることが必要だと思われる。

## 2. グリーフケアに関する認知度

### (1) グリーフケアという言葉の認知度

医療、看護、介護の領域以外の女子大学生の中では、未だ、グリーフケアの認知度が広がっていないという結果が得られた。これは核家族化が進んだことで、身近な人間が、自宅で亡くなることが減少し、病院で看取られる人が増えたことと関係しているかもしれない。これだけ情報が溢れているにも関わらず、我が身のこととして「死」も「悲嘆」も考えたり、感じたりする機会が減少しているのかもしれない。そうなれば「死」は、手厚い医療・看護・介護の果てのものであったか、不当な医療・看護・介護の果てに起きたものかによって、怒りも悲しみも不当感も異なっているのかもしれない。それ故、医療・看護・介護に携わる人間にとって、患者あるいは遺族を対象にしたグリーフケアのあり方が急務になっているのかもしれない。

### (2) グリーフケアという言葉の内容の理解度

グリーフケアという言葉を知ることがないという女子大学生に、グリーフケアの内容を知っているかどうかの回答を求めたので、当然「言葉も知らないし、内容も全く知らない」ということになった。せめてグリーフケアという「言葉を聞いたこと」くらいはあるかと思っていたが、それすらなかったということであった。これは女子大学生であったため、両親を看取った経験が少ないということが関係しているのかもしれない。また核家族化により、祖父母との同居が少ないことや関係性が疎遠なため、在宅でも施設でも、高齢者を看取る経験が少ないことと関係しているのかもしれない。在宅介護が推奨されてきていることを考えると、看取りなどに、何の予備知識もないまま、多くの若年層が介護や看病に携わるようになっていくことが予想される。悲しみとどう対峙していくか、日本における、今後の大きな課題になっていくように思われる。

### (3) 「グリーフケア (悲嘆のケア)」という言葉の定義

「グリーフケア」の言葉の定義として相応しい表現を1つ選択してもらったとき、日本語訳の「悲嘆のケア」を括弧内に表記した。その結果、言葉の定義を選択する際、悲しみ・苦しみに打ちひしがれている人に対する支援の内容として、何が相応しいかという基準で回答がなされたと考えられる。最も多く選択されたものは「悲嘆に暮れる人の傍で支援する、悲しみから立ち直ることができるようにする」であった。しかし、傍で支援するという具体的内容、悲しみから立ち直れるようにするための具体的な方法として何を考えているかを知ることができない。次に多く選択されたものは「離別の際し、自然と始まる立ち直りのプロセス」であったが、自然にとはどのようなことなのか、その内容が不明である。次に「心理的な安定感を与えること」であったが、安



定感をどのように与えるのか具体的な方法が不明である。これは調査用紙により回答を求める限界といえよう。

また「No.3 死化粧、死後処理」は、具体的には、東日本大震災後、遺体の修復方法として認知されるようになった「エンバウア」を想定してのことであったが、選択者は1名であった。まだ一般に認知されていないということであろう。次に「No.4 スピリチュアルな力やエネルギーを用いた治療法」については、近年、スピリチュアルカウンセリング、スピリチュアル心理療法などが、学会で発表されるようになってきているので、項目として入れたが、選択者はゼロ名で、これも一般に認知されていないということであろう。

### 3. グリーフケア尺度と言葉の定義との関係

そこで、グリーフケア尺度の4つのクラスタごとの合計得点の高得点者と低得点者の間で、グリーフケアの言葉の定義として選択した項目の違いをみることで、上述の問題点を補うことにした。

第1クラスタ（「黙って寄り添う」ケア）の高得点者と低得点者について、「自然と始まる立ち直りのプロセス」、「傍にいて支援する」、「安心感を与える」との関係を見てみると、「黙って寄り添う」ケアの高得点者は、低得点者に比べ、「自然と立ち直る」と「傍にいて支援する」を多く選択する傾向がみられた。即ち、高得点者は、遺族は、自然と立ち直る力を持っているので、傍にいて支援するとき、言語より、非言語的コミュニケーションを用いるということであろう。

第2クラスタ（「居場所の提供」のケア）の高得点者と低得点者について、「自然と始まる立ち直りのプロセス」、「傍にいて支援する」、「安心感を与える」との関係を見てみると、「居場所の提供」のケアの高得点者は、低得点者に比べ、「傍にいて支援する」と「心理的な安心感を与える」を多く選択する傾向がみられた。即ち、高得点者は、遺族は、居場所を提供することが、傍にいており、安心感を与えることができるということであろう。

第3クラスタ（「励まさない」ケア）の高得点者と低得点者について、「自然と始まる立ち直りのプロセス」、「傍にいて支援する」、「安心感を与える」との関係を見てみると、「励まさない」ケアの高得点者は、低得点者に比べ、「傍にいて支援する」と「安心感を与える」を多く選択する傾向がみられた。即ち、高得点者は、そばにいて対峙する時に、励まさない方が、遺族は、安心感を得ることができると考えているということであろう。

第4クラスタ（「悲しみを受け止める」ケア）の高得点者と低得点者について、「自然と始まる立ち直りのプロセス」、「傍にいて支援する」、「安心感を与える」との関係を見てみると、「悲しみを受け止める」ケアの高得点者は、低得点者に比べ、「自然と始まる立ち直りのプロセス」、「傍にいて支援する」、「安心感を与える」を多く選択する傾向がみられた。即ち、高得点者は、悲しみを受け止めることによって、遺族は、自然と立ち直り、傍にいて支援してくれていると感じ、安心感を得ることができると考えているということであろう。

### 4. 「死」のイメージ

#### (1) 「死」のイメージの形容詞対の評定平均値 (図2)

女子大学生における「死」のイメージをSD法によって測定したところ、「静かで、冷たくて、暗くて、消極的で、かたい、きびしい、不安定な、古い、ぼんやりした」ものとして捉えられた。その一方で「きれいで、尊重できて、自然な」こととして捉えられた。このことは、日本人の死生観の一部を表しているかもしれない。即ち、「死」とは、暗くて、ぼんやりしているので、不

安であるが、しかしその一方で、「死」は自然なことで、しかも尊重できて、きれいなものとして捉えられているということである。

世界的にみて、日本人に自死が多いことは指摘される場所である。死後の世界は暗くて不安ではあるが、人間は生まれた後、死ぬことは自然なことであり、きれいで尊重できる。これは、死後の世界を蓮の花の咲く、極楽浄土をイメージしているのかもしれない。キリスト教圏では、自死は神に対する冒瀆であり、大罪であるため、地獄に落ちると考えられているが、今回の調査では、「死」のイメージが、きれいで、自然で、尊重できるとなっていることから、自死に至るプロセスが、これほど頑張ってきたにも関わらず死を選ぶのであるから、非難の対象ではないということの意味しているのであろうか。但し、今回の調査は、自死ではなく、「死」であるから、闘病の結果、あるいは不慮の事故や災害による死を考えているとすれば、不当感、怒りを伴うものの、亡くなった者は、これまでの人生を頑張ってきたことが強調され、きれいなものと考えerことで徐々に納得していくということであろうか。

## (2) 「死」のイメージの形容詞対のクラスタ分析 (図3)

クラスタ分析の結果、4つのクラスタが抽出された。高得点、即ちポジティブなイメージは、第2クラスタの4項目のうち「きれい」と、第4クラスタの3項目のうち「尊重できる」と「自然な」であった。古典的な因子構造である「評価」、「力量」、「活動」の分類にはならなかったが、「評価」に属する「きれい」と「尊重できる」が高得点であることから、死は不浄なものとしては捉えられていないということである。そのことが、グリーフケアという支援者の立場になったとき、遺族に対して、死は自然の摂理であり、不浄なことではないのだから、諦めるしかない、早く立ち直ることが必要だという言語表現をしてしまう可能性があるように思われる。

## V 要約

この調査で用いた「グリーフケア尺度」は、遺族に対する適切な態度を測定するように設定した。その結果、大切な人を亡くした遺族が抱く感情として、「悲しみ」は当然であるが、他方「怒り」は持つべきではないと感じているようである。但し、「怒り」の内容については、自分自身に対して抱く罪責感であるか、周囲に対する不当感であるかについては明らかにされなかったので、今後、詳細な調査をすることが求められよう。また、1年程度経過した場合は、そろそろ言語を用いた励ましをしても良いのではないかと、つじつまの合った話をするができるようになってよいのではないかと思っていることが見出されたが、グリーフ(悲嘆)が沈静化する時間には個人差があることや、再燃することがあることが理解し難いものとして捉えられていることがみえてくる。グリーフの支援者として教育していく上で、これらのことを重点的に、伝えていくことが必要であるように思われる。

「死」のイメージとしては、自然なことで、きれいで、尊重できるものだと感じているようである。そのことが、日本人の自死が多いことと関係しているように思われるが、その一方では、グリーフケアという支援する立場になったとき、遺族に対して、死は、自然の摂理であり、不浄なことではないのだから、諦めるしかない、早く立ち直ることが必要だという言語表現をしてしまう可能性があるように思われる。

## [引用文献]

- Deeken, A. 1986 死への準備教育 第2巻 死を看取る. メヂカルフレンド
- 江角弘道 2002 先だったいのち 広島経済大学座禅愛好会・岡本ゼミナール「禅と講演の集い」での講演記録  
[www.h2.dion.ne.jp/~yurikoe/lost%20life.htm](http://www.h2.dion.ne.jp/~yurikoe/lost%20life.htm)
- 江角弘道 2010 グリーフケアについて 平成22年度兵庫教区住職研修会資料  
[www.mariko-inochi.com/jinshouji/houwa/greaf10-6-21.pdf](http://www.mariko-inochi.com/jinshouji/houwa/greaf10-6-21.pdf)
- Fink S. I. 1967 Crisis and motivation: A theoretical model. Archives of Physical Medicine & Rehabilitation, 48(11), 592-597.
- 広瀬寛子 2011 悲嘆とグリーフケア 医学書院
- 井上正明・小林利亘 1985 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成 教育心理学研究 33(3), 253-260.
- ウォーデン (著) 山本力 (監訳)、上地雄一郎・桑原晴子・濱崎碧 (訳) 2011 悲嘆カウンセリング 誠信書房. Worden, W.J. Grief Counseling and Grief Therapy.

第1クラスタ：黙って寄り添う		平均得点	SD
問2-1	本人のそばにいて、そっと温かく見守る	4.204	0.786
問2-6	非言語的コミュニケーション(スキンシップ等)をとる	3.704	1.039
問2-9	“怒り”は当然の感情として受け止める	3.963	0.889
第4クラスタ：悲しみを受け止める		平均得点	SD
問2-7	無理に感情表出を促すよう催促しない	4.185	0.826
問2-8	“悲しみ”は当然の感情として受け止める	4.537	0.605
第3クラスタ：励まさない		平均得点	SD
問2-3	「早く立ち直ろう」等の安易な励ましはしない	4.389	0.656
問2-4	無理に現実を突きつけない	4.130	0.848
第2クラスタ：居場所の提供		平均得点	SD
問2-2	つじつまの合わない内容の話でも聞き返さない	3.741	1.067
問2-5	感情を出しやすい場を整える	4.204	0.683
問2-10	一人で十分に泣くことのできる時間と場所を提供する	4.426	0.662

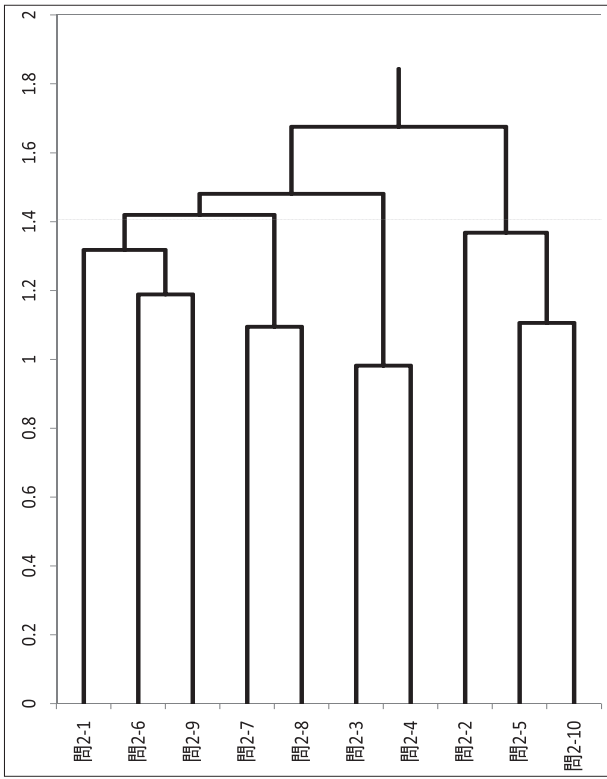


図1 グリーフケア尺度(遺族に対する態度)得点の樹形図

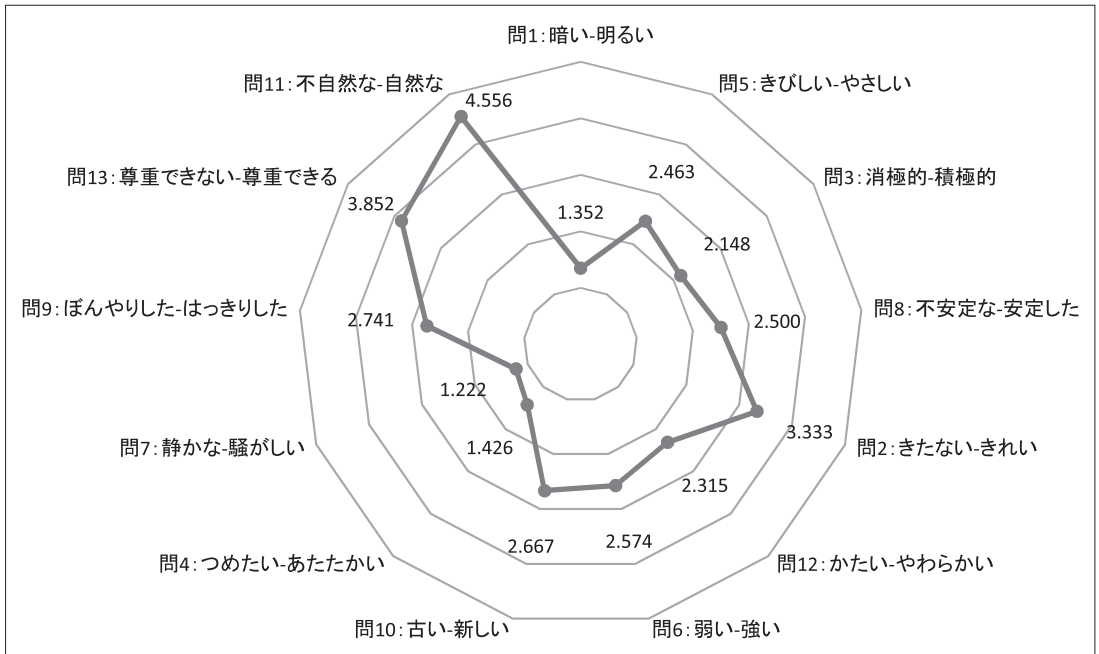


図2 「死」のイメージの評定平均値

第1クラスタ：暗さ、不安定さ	平均得点	SD
問4-1：暗い-明るい	1.352	0.619
問4-5：きびしい-やさしい	2.463	1.094
問4-3：消極的-積極的	2.148	0.960
問4-8：不安定な-安定した	2.500	1.424

第3クラスタ：静寂、冷たさ	平均得点	SD
問4-4：つめたい-あたたかい	1.426	0.716
問4-7：静かな-騒がしい	1.222	0.462

第4クラスタ：自然、尊重	平均得点	SD
問4-9：ぼんやりした-はっきりした	2.741	1.507
問4-13：尊重できない-尊重できる	3.852	0.940
問4-11：不自然な-自然な	4.556	0.816

第2クラスタ：美醜	平均得点	SD
問4-2：きたない-きれいな	3.333	0.777
問4-12：かたい-やわらかい	2.315	1.179
問4-6：弱い-強い	2.574	1.297
問4-10：古い-新しい	2.667	1.009

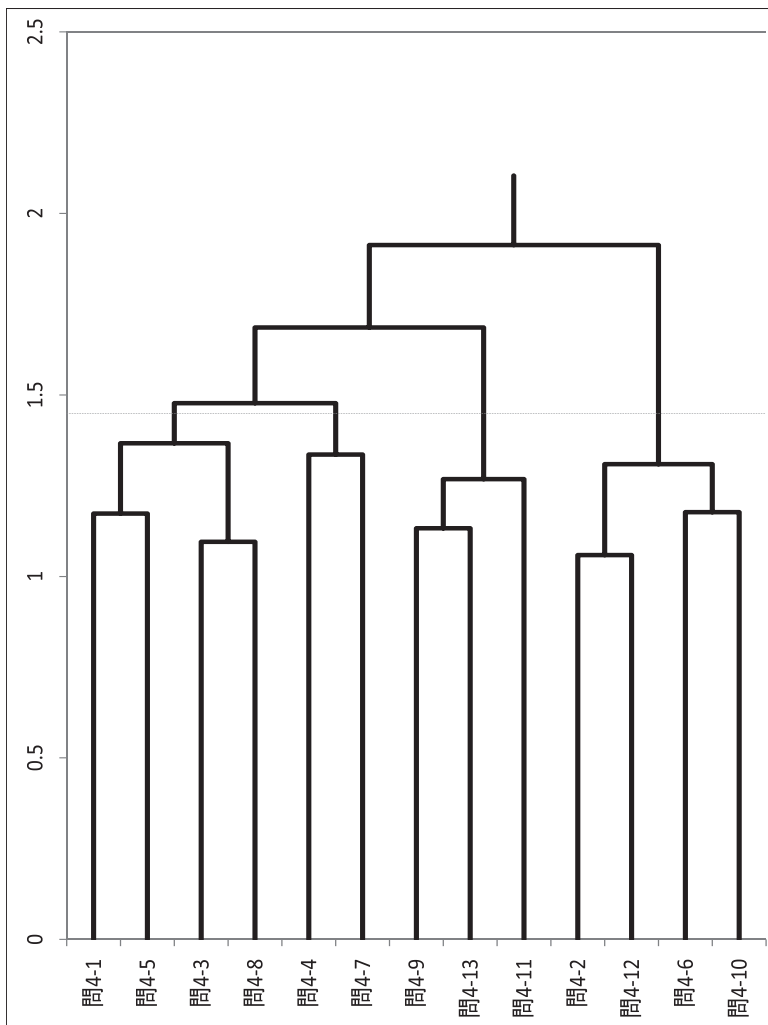


図3 「死」のイメージの形容詞対の樹形図